# 山田洋次監督の作品を読む――「故郷」

私の大好きな映画監督が山田洋次だ。代表作は「寅さん」シリーズだが、ほかにも感動作品は多い。72 年製作の「故郷」もその一つだ。主演は井川比佐志と倍賞千恵子である。渥美清や笠智衆も脇役として渋い演技をしている。

昨年テレビで放映されたときの番組ガイドに次のように紹介されている。「瀬戸内海の小島で船で石材運搬をする夫婦。子供たちや夫の父と幸せな生活を送っていた彼らだが、船の老朽化の問題とともに近代化の波がやって来る。故郷の島に愛惜の思いを残しながらも仕事を求めて新天地へ旅立つ姿を描く。」

この映画は夫婦が必死になって石材を運搬しているシーンがじつに印象的だ。井川と倍賞の名コンビは、きびしい労働と生活を演ずるのがうまい。石材を埋立地に投げ込むときは、船が倒れるように大きく傾く。危険がともなうハードな作業であるが、二人はこの仕事に誇りをもっている。妻も懸命に勉強して船を運転する資格をとるが、そのときの回想シーンが記憶に残る。

仕事を終えて、夕日が美しい島に戻るときの安堵した表情も心にせまる。瀬戸内海の美しい景色が映し出されるが、その一方でコンビナートなどの埋立てにより、環境悪化が進んでいることも示唆される。山田監督の作品は「寅さん」シリーズを含めて、労働と「人間性」をめぐる問題とともに、自然や景観・アメニティといった環境問題にも目が向けられている。

石材を運ぶ船は老朽化が目立ち、高性能の大きな船には太刀打ちできない。船を修理することを諦めて、結局は巨大な造船所に働きにいくことになる。最後の仕事を終えて、島にもどる途中で夫が妻に語りかける言葉が心にせまる。「大きいもんとは何を指すんかいの…..なんでわしらは大きいもんにゃ勝てんかいの」近代化、競争社会、高度成長の光と影といったことを考えさせる言葉だ。これは現在の日本社会、とりわけ「構造改革」の名のもとに進められている改革にもつながる問題である。大きくて強いものだけが生き残こり、グローバル競争下で強いものをさらに強くする改革が進められている。

夫婦と子供が島を離れるときのシーンも感動的だ。渥美清がテープを配り、別れの準備をするが、子供が島に残るお爺ちゃんから離れようとしない。子供を引っ張り上げて、船は島を離れる。胸にせまる別れのシーンである。

(3 月 6 日　記)